

## 山に親しみ山に想う (13)

### — 濟州島の寄生火山 (8) —

<文・写真> =岡本=

#### 8. チョットした話 (その2)

##### (1) 海女(潜女)

濟州島には減ってきているものの、いまだ海女が活躍している。海女は島の東側にある牛島(ウド)に多い。2004年11月下旬に牛島のソエモリオルム(標高133m、比高128m)を探訪した。「海岸沿いのセメント道で30名程の海女集団がふらふら歩く自分を追い抜いて行った。60代以上の年配である。発泡スチロールの浮き、鎌、鋸、水中メガネを持ち、ウエットスーツを着ている。腰には鉛の重りを付けている。ガヤガヤと楽しそうにお喋りしながら足早に磯に急ぐ。右側に日出峰が見える。海岸の絶壁の下の岩に釣り人が10人程、苦しそうにへばり付いている。釣果は如何。よほど釣果が良くないと、割に合わないであろう。セメント道が途切れて行き止まりになる。その手前あたりで海女は右側の磯に降りていく。行き止まりの左の畑より、人跡路を



登る。振り返ると、海女の頭がマッチ棒の頭のように海面に見える。ピーピーと磯笛が聞こえる。初めて聞く磯笛である。それぞれ音が異なる。長いこれまでの人生で初めて聞いた磯笛は、新鮮な体験であった。そして海女により音色や高低が異なり、一斉に磯笛を吹くと妙なるメロディーのようにも聞こえた。

##### (2) オルムとゴルフ場

濟州島は韓国屈指のリゾート地である。島内に幾つもの有名ゴルフ場があり、ゴルフ場コース内にもオルムが存在する。ゴルフ場内のオルムを探訪する場合には、先ず警備室(検問所)にオルム探訪に来た旨を伝えると許可され、駐車場に車を駐める。クラブハウスから迎えに来る職員に名前、住所、電話番号などを伝えると、オルムの登山口まで同行案内してくれる。職員によると、「ゴルフ場造成にあたり、当局よりオルム愛好家に開放する条件が付けられた。オルムはコースに近く、OBボールが飛んできて危ないので。登山口まで直接職員が案内することになっている。」由である。「(オルム頂上で)ゴルフコースがオルムを囲繞している。風向きによっては、コツンという打球音が聞こえてくる。…クラブハウスの職員に無事下山した旨を伝え、警備員さんに挨拶し、すがすがしい気持ちで帰途についた。」ゴルフ場に隣接するオルムを探訪する際、ゴルフ場内の通過許可を頼んでも「別の道から登れる。」と拒否されることもあったが、オルムから下山した地点がゴルフ場内で、偶々出くわした職員のカートに乗せてもらって出口まで送ってもらったこともある。いずれにしてもオルム探訪とゴルフ場の縁は深い。

### (3) ノロ鹿

濟州島内には、熊などの猛獣は棲息せず、ノロ鹿が最も大きな野生哺乳動物である。保護されているので過剰繁殖しており、オルム探訪中に頻繁に遭遇した。「草地のオルムである。ガサガサ、飛び跳ねるノロの尻がみえる。ガオー、ノロ仲間の争いの鳴き声か。」(2004年11月、カッセギオルム)のようにノロに大接近したり、ノロの死骸に出会ったりした。「ノロの死骸を見つける。内臓は融けてしまっているが、皮は残っている。畑とオルムの境の有刺鉄線に引っ掛かったのである。ノロの通り道(獣道)に仕掛けられた罠を多く見かけたが、ノロにとっては有刺鉄線も罠に等しい危険な造作物である。」(2006年8月、チョグンパンエオルム)。



ススキの原にノロが寝そべったのか、直径1m程のフライパンのような跡をよく見かけることがあった。ノロの群れが近くの草地を疾駆して横切っていくのを見た時は、息を呑んだ。10m程先の樹林からこちらを視つめるノロと視線があって、双方睨みあった時には、相手がノロとはいえドキリとし、取るべき次の動作が一瞬頭をかすめたこともある。ノロ

の鳴き声は、しなやかな体型とは裏腹に、ギャーとかガオーとかのダミ声であり、全く可愛くも愛嬌もないものである。ノロの獣道には世話になった。特に冬場に雪が積もっていると、雪上のノロの足跡を辿ると楽であるし、夏場の茨の原でもノロは通りやすいルートを通っている。獣道をノロ並みに背を屈めたり、匍匐して進んだこともある。

### (4) 牛と馬

濟州島には牛馬の牧場が至るところにあり、オルム全体が牧場であることも多いので、牧場を横断する場合が度々あった。牛馬を間近に見たり、時には対峙して緊張する体験をした。「オルム全体が草地である。火口稜線上で一頭の角の立派な牛と睨み合いになった。牛は弱気になっているようであるが、敬遠して20m程の間隔を置いて迂回した。」(2004年10月、タンオルム)。「アザミが咲き、ススキが波打っている。オルムの麓の、有刺鉄線で囲まれた牧場には約20頭の牛が草を食んでいる。その中のリーダーらしき雄牛が一頭こちらを睨んで立ちすくんでいた。一瞬こちらに突進してこないかと恐怖心に襲われた。その牛との距離をとり、ゆっくりと離れるようにしてやり過ごした。」(2004年9月、セミヤンオルム)。



最も強烈な恐怖の体験をしたことがある。両側が柵で塞がれたセメント農道でのことである。水飲み場に向かう牛の大群と農道ですれ違うことになり、群れのリーダーと10m程の間隔で睨み合いになってしまったことがある。この時は恐怖で立ち竦んだ。他の牛は水飲み場に悠々と歩いていくが、自分とリーダーの間では睨み合いが続く。動かず刺激しないよう

にした。長い時間のように感じられた。他の牛が通り過ぎると、漸くリーダーも危険人物から仲間の牛を守り終えたと判断したのか、それこそゆっくりと注意深く通り過ぎて行った。安堵の息を吐くと同時に、大したリーダーだと感心して見送った。リーダーには、危険とみられる敵と対決して仲間を守る重い役目がある。リーダー格の牛が、おいしそうな草場で草を食んでいる格下の仲間を追い払って、横取りしている情景を幾度も目撃したことがある。横取り行為は、リーダーの貫禄というか、重い役目の見返りとして許されているのであろう。

牧場を通る際、馬の群れにもよく出会う。先頭と最後尾を屈強な成馬が守り、幼馬を間に挟んで隊列を組んで移動する。我々のグループ登山を彷彿させる。仔馬を連れておれば、刺激しないようにやり過ごし、馬に譲歩するのが基本である。「農道で水飲み場に向かう4頭の馬と鉢合わせになる。馬は恐れて少し後ずさりするので、こちらも馬に道を譲って迂回した。」(2005年4月、ノッコメクンオルム)。

「20頭程の馬がのんびり草を食んでいる。仔馬連れが多い。…仔馬は好奇心が旺盛なのか、近づいてくる。群れのリーダー格の馬が睨む。闖入者よ、早く出て行けと睨んでいる。闖入の闖は門に馬であって人ではないのだが、早々に立ち去ることにした。」(2005年10月、ムンドジオルム)。

牛馬の足跡で出来た道を牛跡路、馬跡路と称して探訪に利用したが、これらの路は、獣道ならぬ家畜道と言うべきなのだろうか。牛馬ともオルムの火口の草を求めて、意外と思える程の急で高いところまで登ることを知って、義経のひよどり越えの逆落としの話に爰に納得したものである。

## (5) 人との交わり

牛島のオルム探訪に行った際、「(連絡船の波止場で)下船した観光客は、皆んなバスに乗り、田舎道を歩いたのは自分一人であった。小型トラックが急に止まり、「さっき、港で見かけた人、乗りな。」と言う。歩きたかったが、フィルムを買うため近くのコンビニまで乗せてもらった。親切で純朴な人たちである。」(2004年、ソエモリ)。

真冬の2月に、低いが途中に急坂もあるオルムに登った。「小学校5、6年生の男子6人が登ってきた。尋ねると、その中の一人が今日誕生日なので登ってきたというので、その記念に集合写真を撮ってあげた。礼儀正しい子供達である。頂上からみる海原のような爽やかな気分になる(写真を郵送してあげると、お礼の手紙が届いた。)」(2005年2月、メオルム)。



オルム探訪は、自然探訪である。しかし、それだけでなく、探訪で島の隅々まで歩いていると、人と交わることになる。集落の人に道を教えてもらったり、オルムの頂上で山火事監視員と交流したり、ポ

ルチヨ(伐草、墓掃除)の人とコーヒーを飲んだり、思い返せばオルム探訪は、期せずして済州島の人々の篤い人情と世相の探訪ともなっていた。

(完)

<参考資料>

- ・「オルム」 オルム探訪の記録メモを小冊子にした もので、2008年2月作成(本稿でカギ括弧「」で引用した。)
- ・「済州、自然遺産と民俗文化」 済州特別自治道民俗自然史博物館 2008年1月刊
- ・「済州、オルム特集」 済州特別自治道 2016年秋号
- ・「済州歴史紀行」 ハンギョレ新聞社 イ・ヨングン 2004年4月刊
- ・「済州のオルム 368」 テドン出版社 キム・スンテ、ハン・ドンネ 2004年4月刊
- ・「風の故郷オルム」 図書出版高い山 徐 在哲 1998年7月刊
- ・「オルムの旅人」 図書出版高い山 キム・ジョンチョル 1995年1月刊